



森を建てよう。
そうHOPが言える理由

北海道の木が 家になるまで

森と暮らしは繋がっている。
街暮らしが板についた私たちには
もはや概念の世界かもしれないけれど、
森の再生は未来のカギを握っている。
その循環を、家づくりからあるべき姿に。
一人の建築家が挑み続けた
道なき道のストーリーを追った。

取材：文／和田玖美子 撮影／高原淳 デザイン／高山和行
取材協力／ハウジングオペレーションアーキテクト株式会社

木が使われず、 森が荒れる悪循環

地元の木を使って家を建てる。
知らない人間からしてみれば、
こんなあたり前で簡単なことは
なかならうと思う。しかし、地材^{ちざい}
地消^{ちしょう}なんて言葉が持てはやされ
ているのにはやはり理由があつ
て、実はつい最近まで、北海道

とになったのが、トドマツ、カ
ラマツといった外来種による人
工林。20年で直径20センチ。成
長も早いこれらの木々は、炭鉱
の坑木用にと、国策として盛ん
に植えられたものだった。しか
して炭鉱の斜陽化と共に木材需
要もダウン。一度人の手の入つ
た森というのは、適切な間伐な
どによって人が介入し続けなけ
れば維持できないと言われるの
だが、曲がる・捻じれる・割れ
るの三重苦で建築資材としても
「ツカエナイ」木々たちに、林業
従事者の生活を支えることはも
はやできず、森は荒れるに任せ
れ、放置され続けるといふ結末
を迎えていた。

活路を見出し出した建築家が、札
幌にいた。道産木材100パー
セントの注文住宅を請け負う、
HOPことハウジングオペレー
ションアーキテクト代表取締役
石出和博社長だ。石出社長は、
全く価値の見込まれていなかっ
たカラマツ材を、日本で初めて
建築材として実用化させた、業
界では知る人ぞ知る存在である。

眠っていた技術が、
道産カラマツを建材に

「小さい頃、芦別^{あしべつ}の東山にカ
ラマツの苗木を背負って植え
ていたんですよ。アルバイト
で。実家は農家で、親父が若く
して死んでから、耕せない土地

本社屋の隣の敷地に建てられたコンセプトハウス。柱には道産
タモのムク材を貼ったものを、床には道産のナラが使われてい
る。この家は近く解体して売却され、新しく次世代型のコンセ
プトハウスが誕生するそう。



キップ
HOP/ハウジングオペレーションアーキテクト株式会社

北海道の木材の確保から製材、流通、建築に至るまでを協業化する新し
い住宅供給システムを、日本で初めて確立させた札幌の設計建築会社。
道内3箇所のほか、横浜、京都にも拠点をもち、伝統の様式美に現代的
な感性を調和させた新しい木造建築のあり方を提案。設計担当のアトリ
エム株式会社、施工担当の株式会社藤田工務店木工をあわせたHOPグ
ループを形成し、一貫した姿勢によるものづくりは多くのファンを心
を捉えてやまない。

本社／札幌市中央区北4条西21丁目2-1 ☎0120-55-2486
<http://www.hophouse.co.jp>